

技能実習期間中の課外活動に関する取組事例 ①

令和元年度
調査結果

外国人技能実習機構

千葉県 A監理団体

【監理団体概要】

実習生の国籍・人数：ベトナム200名、カンボジア6名、中国3名

実習生の職種：冷凍空気調和機器施工、とび、石材施工、タイル張り、左官、配管、防水施工、塗装

【ポイント】 ✓ SNSを通じ、実習生個々のレベルや目的に応じたきめ細やかな日本語学習支援を実施
✓ 実習生に技能実習以外にも目標をもってもらい、モチベーションを向上させる

写真①



写真②



写真③



SNSを通じて個別に日本語学習を支援

SNSで進捗状況をチェック

監理団体作成のテキスト等

監理団体職員として、実習生の生活指導や相談業務に当たっているベトナム語の通訳人はSNSを通じ、実習生に対して個別に日本語学習を支援している。特に日本語能力試験合格を目指している実習生とは毎日連絡を取り、質問への回答や勉強方法のアドバイスだけでなく、実習生からテキストの学習箇所を写真に撮って送信してもらうことで、進捗状況も確認している（写真①）。また、日本語が上手く話せないため、実習中によくトラブルを起こしていた実習生に対しては簡単な日本語のテキストを作成した。そして、毎日テキストを音読したものを録音してもらい、その発音をチェックして、アドバイスを与えるなど、実習生一人一人の語学レベルや目的に応じた、きめ細やかな日本語学習の支援を行っている。監理団体では傘下実習実施者に実習生が学習しているテキストの写真を送って情報を共有したり、日本語能力試験の受験料負担や実習生の寮に日本語学習用のテレビを設置してもらうといった協力についてもお願いしている。日本語学習の支援を始めてからは、実習生とのコミュニケーションに起因する実習実施者からのクレームが確実に減ってきている。実習生からも「実習が楽しくなってきた」、「ストレスがなくなった」という嬉しい報告がある。

実習生のモチベーションアップを図るために将来の目標を設定

実習生には「帰国してから役に立つような技術や知識を身に付けた方が良い」、「母国で就職した時には日本語が話せると給料が高くなる」というような話をして、実習生のモチベーションを高めている。また、将来の自分をイメージして具体的な目標設定をするようアドバイスもしている。

技能実習期間中の課外活動に関する取組事例 ②

令和元年度
調査結果

外国人技能実習機構

山口県 I 監理団体

【監理団体概要】

実習生の国籍・人数：ベトナム401名、中国34名
実習生の職種：とび、建設機械施工、加熱性水産加工、食品製造業
非加熱性水産加工、そう菜製造業

- 【ポイント】 ✓Web会議システムを導入して、実習生の寮で日本語の講義を実施
- ✓報奨金制度により、実習生が自主的に日本語の勉強をするようになった

Web会議システムを利用した日本語の遠隔教育

監理団体では2019年1月から実習生の宿泊する全ての寮にWeb会議システムを導入して、来日1年目の実習生を対象に日本語教育を行っている。一つの寮において、実習生6名までを1グループとし、約10グループを1クラスとした上で、日本語講師が同時にモニターに映し、授業を行っている（写真①、②）。授業ではテキストのほか、実習現場で使用する用語をまとめた「絵カード集」を作成して、教材としている（写真③）

また、1か月に3回テストを実施し、成績が良くない実習生には補習を行っている。

Web会議システムのメリット

- ・実習生は日本語講師がいる場所まで行かなくても、自分の寮で受講ができる。（移動時間や交通費が不要）。
- ・一度に講義を受けられる人数を増やせる。
- ・寮にいる実習生の現在の状況が見られるので、実習生の安否や健康状態を確認することができる。
- ・日本語の講義だけでなく、各寮の実習生とのコミュニケーション・ツールとしても活用できる。

報奨金制度

監理団体では日本語能力試験の合格者に対して、受験料と報奨金を支給している。試験に早く合格すれば、報奨金が高額になるよう設定している。実習生は自主的に日本語を勉強するようになり、日本語能力試験も積極的に受験するようになった。

写真①



受講中の実習生

写真②



講義中のベトナム人講師

写真③



絵カード集

技能実習期間中の課外活動に関する取組事例 ③

令和元年度
調査結果

外国人技能実習機構

沖縄県 Y 監理団体

【監理団体概要】

実習生の国籍・人数：インドネシア 27名

実習生の職種：漁船漁業

【ポイント】 ✓実習生が海神祭（ハーリー）に参加するようになってから、4年が経過し、漁業関係者や地域住民との交流が深まるなど良好な関係が築かれている。

地域祭りに参加する技能実習生

毎年旧暦の5月4日、八重山地域のマグロ漁が一息つく時期に航海の安全や豊漁を祈願する伝統行事の海神祭（ハーリー）が開催される（写真①、②、③）。海神祭では爬龍船による競漕が行われ、水産関係者だけでなく、一般の団体も数多く参加し、順位を競い合う。監理団体傘下の全ての実習実施者は4年前から実習生と一緒にハーリーに参加している。実習生はチームを2つ作り、団体ハーリーレースに2隻出場している。また、実習実施者が中心となり、実習生がハーリーで着用するチームTシャツを作成した。ハーリーの練習は海神祭の1週間前から許可されるので、実習実施者がその期間の実習を調整し、毎日4時間集中して練習ができる環境をつくった。ハーリーに2つのチームを出場させることで、チーム間の競争心をあおるだけでなく、チームメンバーの団結力が生まれ、協調性も高まる。毎年、海神祭に実習生が参加することで、地元住民の実習生に対する認知度が上がり、地域住民の一員として受け入れてもらえるようになった。海神祭が終わった後の祝賀会には実習生も参加し、地域住民と一緒に踊ったりして親睦を深めている。また、ある実習実施者は成人式を迎える実習生に日本の儀式を体験してもらいたいとの思いから、スーツを新調して成人式に参加させている。

日本語教育の支援

船内での技能実習は日本語が必要とされるため、監理団体では定期的に沖縄本島から通訳人を呼び、日本語の指導をしてもらったり、日本語能力試験の受験機会を与えるなど積極的に日本語の支援を行っている。実習生は日本語で漁港関係者だけでなく、地域住民にも積極的に挨拶をするなど交流を深めており、良好な関係が築かれている。

写真①



写真②



写真③

